

# 天下一品

小川未明

青空文庫



ある日のことでもあります。男は空想にふけりました。

「ほんとうに、毎日働いても、つまらない話だ。大金持ちになればしんないし、また、これという安楽もされなない。ばかばかしいことだ。よく世間には、小判の入った大瓶を掘り出したといううわさがあるが、俺も、なにかそんなようなものでも掘り出さなければ、大金持ちとはならないだろう。」と、その男は、いろいろなことを、仰向いて考えました。

すると、たなの上に乗っていた、古い仏像に目が止まりました。昔から、家にあつたので、こうしてたなの上に乗せておいたのです。仏壇の中には、あまり大きすぎて入らなかつたからであります。

「あの仏像が、金であつたら、たいへんな値打ちのものだろうが、どうせそんなものではないにはきまつている。それに手が欠けていて、どのみち、たいした代物ではない。しかし、あの仏像がいいものであつて、値が高く売れたら、どんなにしあわせだろう。俺は、たくさんの田地をかうし、また、諸国を見物にも出かけるし、りっぱな着物も造ることができよう。」と、男は、黒くすすけた仏像を見ながら考えこんでいました。

家の外には、もうすずめがきて餌を拾って鳴いていました。いつもなら、男は、くわをかついで圃に出なければならぬ時刻でありましたが、なんだか働くということがばかばかしくなつて、その気になれませんでした。

男は、立ち上がつて、たなの上からその仏像を取り下ろして、つくづくとながめていました。ほんとうに、手に取つてこうしてながめるといふようなことは、幾年の間、いままではなかつたのです。また、見れば見るほど、それがいいもののようにも思われてきました。

もうこの世にいない父親が、あるとき、旅のものからこの仏像を買つたということを知っていました。

「こりや、いいものではないかしらん。」と、彼は、ますます考えはじめました。

村に、なんの職業ともきまらずに、日を送っている者がいました。村の人々は、その人をりこう者といつていました。この人に聞けば、役所の届けのことも、また書画の鑑定も、ちよつとした法律上のこともわかりましたので、村の中の物識りということになっていました。しかし、その人は、あまりいい生活をしていませんでした。地所の売買や、訴訟の代理人などになって出て、そんなことで報

酬<sup>う</sup>を得<sup>え</sup>て、その一家<sup>か</sup>のものは暮<sup>く</sup>らしていたのですが、物識<sup>ものし</sup>りという名<sup>な</sup>が通<sup>とお</sup>っているのです。このもののいったことは、村<sup>むら</sup>では、たいていほんとうにしていたのです。

「あの物識<sup>ものし</sup>りのところへ持<sup>も</sup>つて行って、見<sup>み</sup>てもらおうかしらん。どうせつまらないものでも、もともとだ、万<sup>まん</sup>一<sup>いち</sup>いい代<sup>しろもの</sup>物<sup>もの</sup>であつたら思<sup>おも</sup>わぬもうけものだ。人間<sup>にんげん</sup>の運<sup>うん</sup>というものは、どういうところにもいかともかぎらないから……。」と、男<sup>おとこ</sup>は、ほこりだらけの仏像<sup>ぶつぞう</sup>をひねくりながら考<sup>かんが</sup>えていました。

やがて、男<sup>おとこ</sup>は、それをふろしきに包<sup>つつ</sup>みました。そして、これをかかえて家<sup>いえ</sup>から出<sup>で</sup>かけました。野<sup>の</sup>らの間<sup>あいだ</sup>の細<sup>ほそ</sup>道<sup>みち</sup>を通<sup>とお</sup>りますと、もうみんながせつせと働<sup>はたら</sup>いています。自分<sup>じぶん</sup>も、今日<sup>き</sup>日<sup>よう</sup>あたり芋<sup>いも</sup>に肥<sup>こ</sup>え料<sup>えいりょう</sup>をやるのであつたがと、男<sup>おとこ</sup>は、左<sup>さ</sup>右<sup>ゆう</sup>を見<sup>み</sup>まわしながら歩<sup>ある</sup>いてゆきました。物識<sup>ものし</sup>りは、家<sup>いえ</sup>に、つくねんとしてすわっていました。男<sup>おとこ</sup>が、仏<sup>ぶつ</sup>像<sup>ぞう</sup>をかかえて入<sup>はい</sup>つてきたので、物識<sup>ものし</sup>りは、きつとなにかの鑑<sup>かん</sup>定<sup>てい</sup>だなど思<sup>おも</sup>つて、男<sup>おとこ</sup>を歡<sup>かん</sup>迎<sup>げい</sup>いたしました。

「さあ、ようこそお早<sup>はや</sup>くおいでなさいました。」と出<sup>で</sup>てきて、ぴかぴかはげた頭<sup>あたま</sup>を振<sup>ふ</sup>りたてていいました。

「ほかでもありませんが、これをひとつ見<sup>み</sup>ていただきたくいとおもいました。」と、男<sup>おとこ</sup>はいました。

「なんでございますか。」と、りこう者は、包みの上からにらみました。

「仏像です。」

「これは、けつこうなもので。」と、物識りは、見ぬ先から、おそれいったふうにいいました。

「そんないいものではないのですが、どうせつまらないものです。」と、男はふろしき包みを解いて、黒くなつた仏像を彼に渡しました。

「なるほど。」と、うなずいて、りこう者は、その仏像をいただいてから、しばらく、しみじみと見入っていました。

男は、その間、なんとなく胸がどきどきいたしました。恐ろしい宣告を受けるような気持ちでしたのです。

「どうですか？」と、男は、ついにたまりかねてきました。

「まことに、けつこうな品です。」と、りこう者はただいったきりで、あくまで仏像に見入っていました。男は、その言葉を信じられないような、へんな気持ちになりました。

「つまらないものでしょうが……。」と、男は危ぶみながらいいました。

「天下一品、安くて千両の値打ちは請け合いです。」と、りこう者は感謝いたしました。

それが、いよいよほんとうだと知ると、男は、夢のような気持ちが出て、驚いたというよりは、頭がぼろとしました。

彼は、思いきつてたくさんな鑑定料を出して、仏像を堅くしつかりと抱いて、もときた道をもどりました。みんなは、いつしようにけんめいに、せつせと太陽の輝く下で働いていました。高い空のあなたから、太陽は、柔和な目つきをして、働いているひと々を見守っているようでありました。しかし、男は、もう芋に肥料をやることなどは、まったく忘れてしまったように、てんで目は田圃の上などに止まりませんでした。

「あの物識りのいうことに、まちがった、ためしがない。ことに、今日はほんとうに感心したようすでいった……安くて、千両……まあ、なんという大金だろう。俺は、夢を見ているのではあるまいかしらん。いや、たしかに夢でない。千両……買い手によつて千五百両にもならないともかぎらない。その金を俺は、どうして使つたらいいだろう。」

と、男は、もう気が気でなく、体じゆうが熱に浮かされていきました。

物識りが、「天下第一品」といった仏像が、この村の中にあるといううわさが、たちまちあたりに広まりました。我も、我もといつて、みんなが男のところへ仏像を拝みにまわりました。

「ありがたそうなお顔をしていらつしやる。」とか、「慈悲深いお目をしていらつしやる。」とか、または、「なんとなく神々しい。」とか、「みんなが仏像の前に立っていいました。」

「これが千両も値打ちのある仏さまですか。」と、中には、おそろおそろ近寄つてながめ人たちもあつたのです。

すると、この村に、大金持ちで、たくさんこさくの小作人にんげんを使用して、また銀行に預金をして、なにをすることもなく、日を送つてある人間じんげんがありました。欲しいものは、なんでも買いました。見たいところへは、みんないつて見えました。しかし、まだ、自分でなにひとつ満足させるものはありませんでした。金はいくらあつても、それだけでは、この世の中よなかがおもしろくはありませんでした。どうか天下一品のものがほしい。だれもほかに持つてゐるものがないような珍しいものを手に入れたい、と、日ごろから思つていました。

その金持ちの耳に、天下一品の仏像が村にあることが入りました。しかも、目下めしたの家の家いえにあると聞くと、金持ちは、もはやじつとしてはいられませんでした。さつそく、その男のところへ出かけてゆきました。

「今日は。」と、金持ちは、男のところをたずねました。かつて、金持ちが、この男の狭い、うす暗い家を訪ねるようなことは、ありませんでした。

「だんなさまでございますか。」と、男はいつて、金持ちを迎えました。

「ほかではないが、天下一品という仏像を見せてもらいにきた。」と、金持ちはいいました。「いよいよ俺の運が向いたぞ。」と、男は、心の中でいいました。

「仏像というのは、あすここに祀つてあるあれでございます。」と、男はいいました。

いつのまにか、たなの上は、きれいになつて、仏像の前には、花やお菓子などが、並べてあつたのです。

金持ちは、それがどんな姿であろうが、かまいません。金の力で天下一品が手に入れられるものなら、なんでもそれを自分のものにしたかったのです。

「あ、なるほど。」と、金持ちは、軽くうなずいて、それを手に取つてつくづくと見ていました。

「なかなかいい作だ。よほど古いものだ。私はまだこれよりもいいものを見たことがあつたが、この像もなかなかいい。手の欠けているのは惜しいものだ。私は、仏像が好きなので、どうか一つ手に入れたいと思つていたが、どうだろう、この像を譲つてもらえまい

か。」と、金持ちはいいました。

男は、腹の中では、ほくほく喜んでいましたが、口では、そういわなかつた。

「天下一品といえますので、安くて千両だと、あおりこう者がいいました。なにしろ先祖代々の宝物でございまして、なるだけ売りたいくはないと、思っています。」と、男は、さもさもらしく答えました。

そう聞くと、金持ちは、ますますこの仏像がほしくなりました。

「どうだ、千両で私に売ってはくれまいか。」と、金持ちはいいました。

男は、二千両も、もつと高くも売れたかつたのです。

「まあ、考えてみましょう。」と、あいさつをしました。金持ちは、自分のほかには、千両も出して、この仏像の買い手は、あまりあるまいと思いましたが、その日は、それで帰ったのであります。

隣村に、もう一人金持ちがありました。この金持ちも天下一品の仏像がぜひ見たくなりました。それで、わざわざ男のもとへやつてきました。

「どうか、仏像を拜ましてもらいたい。」と頼みました。

「さあ、どうぞごらんくださいまし。仏像はあれでございませう。」と、男は、たなの上

の仏像を指さしました。

「あ、あの仏像ですかい。地金は黄金ですか、なんでできていますか。」と、隣

村の金持ちは聞きました。

「さあ、地金のことは、ぞんじませんが、鑑定してもらうと、安くて千両の値打ちがあるとのことです。先刻も、村の旦那さまが見えて、千両で譲ってほしいといわれました。」と、男は話しました。

「じゃ、千両で買い手があるのですか。」

「さようでございます。」

「どうだ、私に、千三百両で譲ってくださいませんか。」と、隣村の金持ちは頼みました。

男は、しめたものだ、心の中で思いましたが、けっして、顔には見せませんでした。

「なにしろ、先祖代々からの宝物ですから、なるべくなら手放したくないと思つています。よく考えてからご返事申しあげます。」と、男は答えました。

隣村の金持ちは、またくるといつて、その日は帰ってしまいました。

後で、男は、これは、またなんというしあわせが自分の身の上にならわいてきたものかと考  
えると、頭がなんとなくぼんやりしてしまいました。そして、それからというもの、仕

事が手につかず、圃へも出ませんでした。男は、口の中で、千三百両……と、口癖になつて、繰り返して、いつていました。

「地所を買うこともできる。見物に出かけることもできる。」と、独り言をして、夜が明けると、日が暮れるまで、夢を見るような気持ちでいました。すると、そのとき、

「この田舎でさえ、千両や、千三百両で売れる仏像だ。町へいつて見せたら、もつと、高く売れないともかぎらない。」と、ある人は、男に向かつていいました。

男も、なるほどと考えました。そこで、その仏像を大事に包んで背中におぶつて、町へ出かけてゆきました。途中も、男は、ただ一つ事しか考えていませんでした。そして、口の中では、千両……千三百両……といつて歩いていました。

男は、ついに町へ出ました。そこには、大きな骨董店がありました。男は、まずその店へいつて見せようと思ひました。そして、店先に立つて、なるほど、たくさんいろいろな仏像や、彫刻があるものだと、一通り飾られてあるものに目を通したのです。

「いくらいいものがあつても、俺の背中にあるような、天下一品はここにもあるまい。」と、男は心の中でいいながら、ながめていました。

すると、たなの中ほどのところに、寸分違わない、仏像が置いてありました。男は、

これに目が止まると、はつと驚きました。そして、自分の目のせいでないかと、なお、大きく目を開けてじつと見ますと、まさしく、自分のおぶっている仏像と、古きから、形まで違わないばかりか、しかも手も欠けていず、完全な仏像でありました。

「天下第一品が、ここにもあるぞ。」と、男はたまげてしまいました。そしていくらするものだろうと思いましたが、男は、店の中に入って、きわめて平気を装って、その仏像の値を聞いてみました。

「あのたなの中ほどの古い仏像ですか、おまけして、五両でよろしゅうございます。」と、番頭は、答えました。

「五両？」と、男はいつて、耳を疑いました。千両……千三百両……が、五両？ きつとこの番頭は盲目なのだ。俺は、一つを村の大尽に千両で売り、一つを隣村の金持ちに、千三百両で売ってやろう。

こう、とつさの間に男は思いました。彼は、財布をはたいて、五両でその仏像を買いました。そして、それを横抱きにして、大急ぎで村を指して帰ってきました。

家に帰ってから、背中の仏像をおろして、買ってきたのと二つ前に並べてみますと、まさしく寸分も違っていないませんでした。男は、手の欠けていない仏像をふるしきに包

んで、それを持つて、隣村の金持ちの家へ出かけてゆきました。

金持ちは、家にいました。男を見ると、笑顔で迎えました。

「仏像を持つてありがとうございました。」と、男はいいました。

「あ、それは、それは、じや、先日せんじつの値あたで売うつてくださるか。」と、金持ちは、大喜こびでした。そして、男おとこの出だした仏像ぶつぞうを押おしいたいて、眼鏡めがねをかけてじつと見みましたが、

「これは、先日せんじつの仏像ぶつぞうであるかな。」と、げんなり顔かおつきをしてたずねました。

「さようでございませう。」と、男おとこは、頭あたまを下さげた。

「いや、違ちがう。先日せんじつ見たみのは、たしかに手てが欠かけていた。私わたしはその欠かけたぐあいが、た  
いそうおもしろいと思おもつて氣きに入いつたのだが……。」と、金持かねもちはいいました。

「じや、あなたは、手ての欠かけているのがよろしいのですか、それなら家うちにありますか。」  
と、男おとこはいいました。

すると、金持かねもちは、目めを丸まるくして、

「家うちにある……まだ、これと同じ仏像ぶつぞうが家うちにあるのですかい。」

「さようでございませう。手ての欠かけたのなら、家うちにあります。」

「いや、それなら、私は、よしておこう。天下第一品と聞いて、つい買う気になったのだが、そういくつもあつては、もう欲しくはない。そういえば、あまりこの仏像も好い作ではないようだ。」と、金持ちのようすは、急に変わりました。

男は、失敗してしまいました。その家を出ると、彼は、残念でたまりませんでした。うまくゆけば二つで二千三百両になるものだと思いますと、ほんとうに取り返しのつかない、失敗をしたと気づきました。彼は、どうかしてこの埋め合わせをしなければならぬと思ひました。

「村の大尽に、高く売りつけてやろう。」と、男は考えました。

男は、家に帰り、今度は、失敗をしないつもりで、手の欠けた仏像をふるしきに包んで、村の金持ちのところへ持って出かけました。

金持ちは、男がやってくる、にこにこして迎えました。

「じつは、おまえさんが見えるだろうと思つて、待つていた。あの仏像を持つてきたかい。」と、金持ちはいいました。

「さようでございます。」と、男は、さつそく、包みを解いて仏像を出しました。金持ちは、仏像を取り上げて、つくづくと見ていました。

「天下第一品の代物でございます。千五百両で買つていただきとうぞんじます。」と、男はいいました。

「千五百両でも、二千両でも買うが、惜しいことには手が欠けている。私は、もともと傷物は大きらいなんだ。千両でも、じつは考えているんだ。」と、金持ちはいいました。

「なににしても、いい作でございます。」

「ああ、作は、まず申し分なしといつておこう。ただ、手の欠けているのが惜しい。」と、金持ちはいいました。

男は、もう一つの完全なほうを、ここへ持つてくれば好かつたかとまどいました。

「じつは、先祖の時代から、もう一つほかに同じ仏像が伝わっています。そのほうなら、手も完全でございます。」と、男はいいました。

すると、金持ちは、喜ぶかと思いのほか、手に持つている仏像を下に投げるように置きました。

「この詐欺師めが、天下第一品に、二つあつて、たまるものか。おまえは、あの物識りとぐらになつて、俺に、やくざ物を買わせようとたくらんだにちがいない。そんな量見だと、この村から追い出してしまふぞ！」と、金持ちは、たいそう怒りました。

男は、もはや、取り付く島がなく、そこから逃げるように出ましたが、なんだか、いままでのことが、みんなはかない夢であつたというような気がして、いま、はじめて目が覚めたのでした。

田圃を通ると、ほかの田圃は、みんなよくしげつていいできでしたけれど、自分の田圃ばかりは、草が茫々と生えていました。そして、みんなから、大金持ちになつたというわさをたてられているだけに、明日から、また田圃へ出て、草を取る気にもなれず、男は、二つの仏像をいまいましそうににらんで、あきれたように家のうちに閉じこもっていたそうであります。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「北國新聞」

1922（大正11）年1月1～2日

※表題は底本では、「天下《てんか》一品《びん》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年11月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 天下一品

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>